

思い出の復元

karinomaki

私の書いた紙

私には、この世に命にもかえがたい宝物がありました。それは、私が十年間書きためた膨大な紙でした。その宝物を、私はある人に全て捨てられてしまいました。その時私は精神科に入院中で、おそらくその人は、私が狂って書いたものとして、それを全て捨てたのです。

悪夢のような外泊

精神病患者は、回復してくると、家に泊まってみて普通に暮らせるかためす、「外泊」というものをします。私は当然、書いたものは残っているものと思い、わくわくして家に帰りました。しかし、家には、からっぽのクリアファイルの山が残され、中身は見事に全て捨てられていました。

私は、病院に早々に帰り、わんわん泣きました。その時私の先生は、外来の患者さんを診る日だったのですが、私の状態があまりにひどいので、看護師さんが先生を呼んで下さいました。

先生！！＃\$％&*・・・と私が錯乱して叫ぶと、先生は、「三回深呼吸をしてから話さない」と落ち着いて言いました。私は、家に何も残っていなかったこと、へやの机の鍵がこじあけられて鍵がみあたらなかったことなどを、わめきました。

先生

「先生、頼むから一生入院させて下さい。あのような、大切なものが何もない家にはもう帰れません。」と私は言いました。しかし、先生は言いました。「君はまだ41才だろう。0からやり直さなさい。」

私は退院しました。

退院して一日後、夕日を見て私はまたわんわん泣きました。今度は、なつかしくて。先生が大好きで。

私は、例え誰かと支えあっていっても、先生に0からやり直せと言われたことは、私の先生への永遠の思いを表すと思いました。

私の涙は、失くしたものの空白を見事に埋めていってくれました。

誰かを大切に思う気持ちは、自分だけの宝物をはるかにはるかに超えていました。私は幸せだと思いました。

折り鶴

私は入院中、鶴を折っていました。その鶴とともに、私は退院後、つらい思い出の品を捨てていきました。家の中は明るくなっていきました。

その時の鶴は、私の失くした紙たちを空に連れて行ってくれたことと思います。

そして、身近に大切な友達が何人かできても、先生は、私のいちばん大切なひとになりました。

私は間違っていました。私の宝物を捨てたひとを恨んでもなにも始まらない、きっと、そのひとは、私のために捨てたのだから。そして、捨てた空白に、今、美しい色とりどりの鶴が飛んでいます。毎日何をしても、失った傷を埋める作業となり、それが私の生きる喜びです。

何かを失ってしまわれた方、失ったもの、ひとは天にのぼりました。あなたが大切に思っているのならそれは100%まちがいがありません。

失ったものを埋めようとするときが、ひとをいちばん強く美しくしてくれることを思って乗り越えて下さい。